

希望

チューリツヒ日本人学校便り

平成27年10月19日発行

第24号

発行人 校長 鈴木史良

学習発表会、目前に迫る！

—— 楽しみながら、自分の存在感を大いに発揮しよう——

10月24日(土)に、平成27年度の「学習発表会」をおこないます。子どもたちは間近に迫った学習発表会のために、背景や大道具、小道具、衣装などを作製したり、劇のせりふを覚えたり等、一生懸命取り組んでまいりました。当日は保護者の皆様をはじめ、多くの方がたにご覧いただきたいと思ひます。

小学部1・2年生の発表劇は「スイスイ、スイミー」、3・4年生の発表劇は「ありがとうの花」、5・6年生の発表劇は「夢から醒めた夢」、中学部はオリジナル脚本による「第三次大人子供戦争～大人になるって？～」の発表です。

各学年とも少人数ですが、さまざまな工夫が凝らされており、見応えがあります。劇後の音楽発表では和太鼓の力強い演奏をご披露いたします。子どもたちの真に迫る演技や迫力満点の演奏をお楽しみください。

また、ここに先週の全校朝会で発表された学習発表会のめあて(具体目標)を紹介いたします。このめあては、児童生徒会長を中心とした執行部の子どもたちが考案し、発表したものです。子どもたちからの説明を聞くと、どのめあても意味づけがしっかりなされており、仲間たちを思う細かな配慮もあって、たいへん感心しました。

【学習発表会のめあて】

○ 楽しんで 動きや声を堂々と

失敗しないようにすることばかり考えていると、小さな演技になってしまい、見ていてもつまらないものになります。そうなるより、自分が楽しむ気持ちになってはずかしがらずに堂々と演技したいという気持ちが込められています。

○ 教え合い 相手のよさを伝えよう

練習を重ねていく中で、自分ではその演技でいいのか、もっと変えたほうがいいのか、わからなくなるときがあります。そんなとき、仲間同士で互いにプラス言葉での声掛けをし合っていくと、がんばろうという気持ちが盛り上がります。

○ リアクション 涙も笑いも大切に

学習発表会当日は、自分たちの劇を発表するだけでなく、他の学年、中学部の発表も見学します。ステージでがんばって演技している姿を見たときに、大きな拍手など演技者も喜んでくれるようなリアクションをとりましょう。



廊下壁に掲示されたスローガン



執行部によるスローガン説明

天高く・・・読書の秋！

学習発表会のめあてが発表された全校朝会で、児童生徒委員会の子どもたちが、一人一冊、読書の秋にちなんで、子どもたちの目から見たお勧めの本を紹介してくれました。(原文のまま)

書名：「すてきな三人ぐみ」

内容：黒マントに黒ぼうしの三人ぐみのどろぼう

が、おたからをあつめるのにむちゅうでし

た。ところがある日、さらってきた子がおたからを見つけてしまいました

た。すてきな三人ぐみは、あるいいことをおもいつきました。・・・そのいいこととは、本をよんでからのおたのしみ！

書名：「海底二万里」

内容：コンセイユ、アナクロス、ネッドがなぞの生物をおいかけます。その生物のしようたいは何なのでしょう。ネモかん長は何者なのでしょう。このせん水かんはとてもこわいですよ。

書名：「西の魔女が死んだ」

内容：中学校にどうしても足が向かなくなった少女まいは、大好きな祖母、西の魔女のもとに預けられる。まいは西の魔女に魔女の手ほどきを受けるが、それは何でも自分で決めるということだった・・・。

書名：「ハリーポッターと賢者の石」

内容：この本の主人公はハリーポッターです。いちばんおもしろいところは、ハリーを一度おそったヴォルデモートとハリーポッターが賢者の石という伝説の石をかけた戦いがものすごくいいです。



本を紹介する委員会の子どもたち

読書の秋——名作三十選(日本近代・現代文学)の紹介

日本の勤務校で国語部教師たちが選び、生徒に配付したものです。必読文学の書き出しの敷衍を記したもので、名作に親しむ機会をふやそうと、校舎の到る所に掲示しました。

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷に呼びだされて、そこで暇乞いをすることを許された。

(森鷗外『高瀬舟』)

吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたかとかと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていたことだけは記憶している。吾輩はここでではじめて人間というものを見た。(夏目漱石『吾輩は猫である』)

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかには、れもない。ただ、ところどころ丹塗りの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。

(芥川龍之介『羅生門』)

朝、食堂でスープを一さじ、すつと吸ってお母さまが、「あっ。」と幽かな叫び声をお拳げになった。「髪の毛？」スープに何か、イヤなものでも入っていたのかしら、と思った。「いいえ。」お母さまは何事もなかったように、またひらりと一さじ、スープをお口に流し込む。(太宰治『斜陽』)